

落ちこぼれ

Ochikobore [☆1] Mahoutsukai wa,  
Kyo mo Muishiki ni Cheat wo Tsukau....

[☆1]魔法使いは

今日も無意識にチートを使う



11

右 薙 光 介

Presented by Kousuke Unagi



## レディ・ペルセポネ



ノーライフキング

『青白き不死者王』の  
異名を持つ。世界を破滅に  
追いやる『淘汰』の化身。

## オルゾー



モーティア王国の  
非道な実験によって  
人造魔王となった少年。

## ロータス



反体制組織『トゥルーマンズ』を  
率いる☆1の青年。  
ペルセポネの使徒になった。

# 主な登場人物

Characters

## ミント



ユウの姉でアストルの妻。  
陽気な性格でパーティの  
ムードメーカー。  
大剣を軽々と振り回す。

## ユウ



アストルの妻で  
ミントとは双子の姉妹。  
物静かな魔法使いの少女。  
アストルの心の支えに  
なっている。

## アストル



最低ランク☆1のアルカナを  
授かってしまった少年。  
『インヒーレンス先天能力』により、  
魔法を自在に使いこなす。

## チヨ



## エインズ



## レンジウロウ



アストルとパーティを組む仲間達

## 迫る落日

アルカナの☆の数か人の能力や価値を決定つけるこの世界<sup>レムシリア</sup>。

☆1という最低ランクのアルカナを持つしがない魔法使いの俺——アストルは、魔王シリク復活による世界の『淘汰』<sup>とうた</sup>、通称『魔王事変』<sup>まおうじへん</sup>を阻止したことで、少しばかり有名になってしまった。

『魔導師』<sup>マギ</sup>などという大層な二つ名で呼ばれるだけでなく、アルワース賢爵<sup>けんしやく</sup>として貴族にも叙され、いつの間にか☆1の象徴的な存在に祭り上げられていた。

ところが、ロータスという☆1の男がその『魔導師』<sup>マギ</sup>の名を騙り<sup>かた</sup>、『トゥルーマンズ』なる反体制組織を率いて各地で☆1解放のための軍事行動を始めたことで、話がややこしくなった。

ロータスをはじめ、組織を構成する中心メンバーは、モーディア皇国の非道な実験の被験者になった☆1達で、彼らはそれぞれに人知を超えた特異な力を持っている。そして彼らの裏で糸を引くのは、『青白き不死者王』<sup>あおしろふらいフキング</sup>ことペルセボネ。レムシリアの創造主にして世界を破滅に追いやる『真なる淘汰』である。

世界を分断し、反転させようとする『トゥルーマンズ』の企み<sup>たくみ</sup>を阻止するべく、俺は頼れる仲間

達と共に本格的に動き出したのだった。



『トゥルーマンズ』によるドウルケの町襲撃から一カ月。

学園都市ウエルスに戻った俺は、『無色の塔』の一階の執務室で、諜報組織『木苑』の長グレイバルトから状況報告を受けていた。

変装を解いたグレイバルトが、俺の正面に座る。

「それで、『トゥルーマンズ』の動向は？」

「依然、足取りも尻尾も掴みきれておりません。ですが……これを」

俺の質問に、グレイバルトが頷きつつ資料を机に広げた。

「……！ 噂は、本当だったんだな」

「はい。モーディア皇国は完全に滅び去りました」

「どう見る？」

「私見と予測の範囲を出ませんが、おそらく『トゥルーマンズ』の仕業だと考えています」

「だろうな。俺も同じ考えだよ。しかし、たった三カ月で……あの大国が……」

小さくため息を吐き出して、資料に記載されている事実を目を通していく。

どれもこれも信じがたいものだが……事実として俺の前に『淘汰』たる異界の女神——レディ・ベルセポネが降臨し、蹂躪と終焉の片鱗を見せつけたのだ。

何が起こったって不思議ではない。

「さて、何がしたいんだろう？ 彼らは」

「私怨によるものか、アストル先生への示威行為か。もしくは、その両方だろうか」

「そのどちらでもない可能性もある。何せ、モーディアは『穢結石』精製の本場だからな」

人間を汚染し『悪性変異』へと変貌させる瘴気。

それを高濃度に凝縮して精製した『穢結石』。

どちらもこの世界にあってはならない脅威だが、『トゥルーマンズ』はそこから生まれ、この世界を変えていこうという☆1ばかりの過激な思想集団だ。

そして、その中には『穢結石』を生み出す力を持つ「魔人」オルゾーなる少年がいた。

モーディアの作り出した人造魔王——その成功例。

彼が『穢結石』を生み出すために必要なモノが何かはわからないが、モーディア皇国にはきっとそのリソースがたくさんあるに違いない。

「考えていたら頭が痛くなってきた」



「ヴィクトール王にもすでに伝えております。一人で抱え込まないようにと言伝をいただいていますよ」

グレイバルトの言葉を受けて、それまで両隣でじつと黙っていた二人の妻——ミントとユユが、同時に俺の腕を抱く。

「そうよ、アストル。アタシ達だっているんだからね！」

「ん。みんなで、考えよう」

二人のぬくもりに少しばかり癒されつつも、俺は苦笑しながら返す。

「わかってるよ。俺一人の手に負えるなんて思っちゃいないさ。ただ、俺にしかできないこともきつとある」

「こちらでも打てる手は打ちます。アストル先生もあまり根を詰めすぎないようにしてください」

「ああ。頼りにしているよ、グレイバルト」

頷く俺の前でグレイバルトの姿がにじみ、ドアを閉める小さな音と共にその気配は完全に消えた。相変わらずの凄技だ。どんな魔法でだって、グレイバルトの真似はできやしないだろう。

「あれから一カ月。どうにも出遅れている感があるな……」

「仕方ないわよ。向こうには集団で転移できる能力者がいるんでしょう？」

俺の呟きに、ミントが反応した。

「ああ、確か『百歩移』のブリトニー、だったかな」

どこか享楽的な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を纏<sup>まと</sup>わせた年端<sup>としは</sup>もいかぬ少女に見えたが、彼女の力も厄介だ。

『トゥルーマンズ』の神出鬼没性は、おそらく彼女の力によるものだろう。

国境線を封鎖するグランゾル侯爵<sup>こうじやく</sup>の監視を易々と突破してモーディア本国に移動するあたり、かなり高性能で汎用性が高い力と思われる。

『トゥルーマンズ』という偏った思想集団であるが故に、いきあたりばつたりな運用がなされているようだが、あれを奇襲や撤退戦で有効活用されると、かなりの損害を覚悟しなければならない。

「こつちも、できれば、いいんだけど、ね？」

「できないことはないがね」

ユユの言葉に応えて、小さな煙をぼんと上げながら、机の上に使い魔のナナシが現れた。

まるで自分のアイデアのように言っているが、俺が【神威】<sup>しんい</sup>を会得して以来、二人で検証を重ねていたことだ。

何せ、今の俺は半分神様である。

小規模ならば、世界の理<sup>ことわり</sup>にだって手を加えることができる。

そして、おそらく——『百歩移』のブリトニーの力にしても、その源は『はじまりの混沌』<sup>アルコイシ</sup>たる『青白き不死者王』<sup>ソライフキグ</sup>から下賜されたものに違いない。

「できるの!? アタシ達もパツと消えたりできる?」  
驚きを露わにするミントに、俺は頷いて答える。

「理論上は可能だと思う。『繋がり』を形成して、俺と一塊の存在だと認識されればできるはずだ……今の俺なら」

【神威】の、力を、借りるのね?」

「ああ。つまり、この世界を歪めないといけない」

ユウの問いに、俺はあえて露悪的な言葉を口にする。

次元の狭間に存在する『過ぎ去りしいつかのあの日』で『永遠と終焉の記録者』の R から俺が授かった力は、まさに埒外だ。

ペルセポネに対抗するという名目で今は許されるかもしれないが、逆の見方をすれば、この世界や……別の世界を侵略できてしまう力に他ならない。

個人が好き勝手に揮ってよい力の範疇を、確実に超えている。

「アストルが嫌、なら、ユウは、いい」

「んー……アタシも」

「ダメよ、アストル」

ユウとミントが俺を甘やかす声を、ぴしやりと打ち消す言葉が響いた。

それは子供を窘める母の声であり、伝説の冒険者の忠告でもあった。

「母さん……」

「使えるものはなんでも使う。それが冒険者って生き方よ? ある物を使わないで仲間を危険に晒すつもり?」

「うっ……」

生ける伝説たる母ファラムの言葉は重い。

確かに、その通りだ。

俺のような☆1が、出し惜しみする余裕などありはしない。

何せ、相手は終末を呼ぶ神なのだ。

「でも、義母様……アストルは、きつと、なんとかする」

「当たり前よ! 私の息子でユウちゃんの旦那だもの。でもね、最初からカードを伏せておく必要はないわ。蹂躪できるなら蹂躪するに越したことないのよ、『淘汰』なんてものはね」

そう笑う母からは、妙な説得力が醸し出されている。

相変わらず、母の謎は多い。伝説的冒険者にして、戦場の殺戮者、業火の魔女。

何故か『淘汰』や異世界に対する造詣も深く、何かを隠しているのは言葉の端々からもすぐわかる。

今回、俺が【神威】を得て、半神半人になったことについても、それほど驚いた様子はない。そんな母が、俺に【神威】を隠すなど言う。

これはきつと素直に聞き入れた方がいい忠告に違いない。

「わかったよ。全力でいく」

「それがいいわね。それで、全力をもっと鍛えた方がいいわ。あなたのその力、まだまだよ？」

「え、あれで!？」

母の言葉にミントが驚きの声を上げた。

それに微笑んだ母が、俺達をじっと見る。

「ちょうどいいわ。みんな、稽古をつけてあげる」

ひりつくように冷えた殺気が、団欒中の俺達の居住まいを正させた。



俺達は母の後について、学園都市から少しばかり離れた森の奥へと向かう。

そこで待っていたのは、以前助けた☆1の少年、ベンウッドだった。

顔つきは少し精悍になっていて、体も一回り大きくなった気がする。

「アルワース様！」

「ベンウッド！ どうしてここに?」

「ファルメリアさんに連れられて、一週間ほどここで生活しています」

「え」

そんな報告、グレイバルトからも受けていなかったのだが？

「母さんが口止めたのよ」

俺の思考を読んだかのように、母が疑問の答えを口にした。

「てつきり、バーグナー領都でマーマと暮らしているのかと」

「お願いして、ついてきたんです。妹のマーマと、彼女の生きる世界を守るために、僕に何ができるかを考えて」

賢い子供だとは思っていたけど、決断力も半端ではない。

とはいえ、まさか母についてきているとは。

「それにしたって、どうして森の中で……? 学園都市が近いんだから、うちの塔に来るなり、宿をとるなりすればいいのに」

俺の言葉に、母が首を横に振る。

「この子が思い描く通りに強くなるためには、過酷な環境が必要だったのよ。そう、アストルに並

べるくらいになるにはね」

「俺に？」

「ええ、あなたに。世界に——マーヤちゃんに降りかかる火の粉を払うには、あなたと並んで戦えるくらいの力が必要でしょ？ 今は、いつどのタイミングで『淘汰』が始まるのかわからない状況だし、ちょっと急ぎ足の荒行って感じね」

にこにこしているが、こと戦闘において母は異常だ。

生き方そのものが血と炎に彩られた母の教育論は、俺の時に発揮はされなかったが……冒険者として並んだことのある今ならわかる。

業火の魔女<sup>ブレイズウィッチ</sup>が口にする「荒行」が、ただ事であるはずがない。

きつと、ひどいことになっているはずだ。

「えーつと、大丈夫なの？ ベンウッド君は」

ミントの言葉に、ベンウッドは頭を掻いて苦笑する。

「最初はきつかったですけど、マーヤのためですから」

「そうは言っても、ボロボロよ？」

「何度かは生死を彷徨ったので、まあ」

……やっぱりマズいことになっていた。

最強にして伝説の冒険者である母の辞書に、“加減”という文字があるのか疑問だったが……おそらくないか、たとえあったとしても、決定的に加減を誤っている。

少なくとも、つい最近まで非力な☆1だった少年が耐えられるような所業ではない。

「さ、それじゃあ四人でかかってらっしゃい」

母はそう言っ、そこらの木から削り出したらしい木製の双剣槍<sup>ツインランサー</sup>を片手に、俺達を見つめる。

その立ち姿を見て、膝が少し震える。

「……ッ」

ただ立っているだけで、なんて圧だ。

ペルセポネの発する原初的な恐怖とは質が違ふものの、恐怖するに充分な重みをもった殺意が溢れ出していた。

これ……稽古、だったよな？

「四人がかりって、さすがにファラムさんでも」

ミントの言葉に、母がうつすらと笑みを浮かべる。

「あら、私に勝てないようじゃ『淘汰』になんて絶対勝てないわよ？」

安い挑発とも思える言葉だが、妙な重みがあった。

「いいわ、やる！ ファラムさんには、いつか挑んでみたかったもの」



木の大剣を担ぎ上げて、ミントがその目にやる気を宿す。

言葉こそないものの、隣に立つユユも同じ意見のようで、すでにいくつかの魔法を無詠唱で編み上げているのが見て取れた。

「しかたない。ベンウッドは？」

「僕もやります。今のところ全敗ですから」

俺が尋ねると、ベンウッドはしっかりと頷いた。

「母さんに勝てたら、俺にも勝てるよ」

そんな言葉を口にしつつ、俺は塔から持ってきた木の小剣を構えて腰を低くする。

魔法の小剣ではないので少しばかり不安はあるが、俺の本懐は魔法使いで、剣士ではない。

前衛——ミントとベンウッドを支え、ユユをフォローする中衛だ。

「いつでもいいわよ？ かかってらっしゃい」

母の言葉が終わるか終わらないかのうちに、ユユと二人で牽制となる〈魔法の矢〉の魔法を放つ。

【反響魔法】も含めて、その数……五十本。

ちよつとした魔物なら消し飛んでしまうような数だが、これが牽制にしかないのは、俺もユユもわかっていた。

「良い感じよ、アストル」

子供の工作を褒めているみたいに和やかな言葉と同時に、母の姿が小さな土煙と共にかき消えた。グレイバルトのような空気に溶けるといった類のものではない。

ただ踏み込んだだけだ。それを理解した時には、もう母の姿が目の前にあった。

「でも、甘いわね。あんなにたくさん時間をあげたのに、大魔法を仕込まないなんて。もしかして、母さん……舐められているのかしら？」

「ん、な……!？」

驚く俺に、母は笑顔で双剣槍を振り下ろす。

肩、腰、と衝撃があつて、最後に膝が折れた。

「実戦なら、これで終わりよ？ アストル」

地面に倒れ込む俺に、和やかな母の忠告が染みる。

これでも、ずいぶんと手加減されていたのは明白だ。母なら木製の武器だろうと人くらい切り裂けるに違いないし。

「ぐ……」

「アストル！」

「アストル……!」

ミントとユユが駆け寄ってくる。

そんな姉妹妻の首筋にびたり、ぴたりと連続で刃の部分を触れさせて、母がため息を吐いた。

「はい、二人ともアウト。もう……戦場で冷静さを見失っちゃだめよ？ ベンウッドを見習いなさい」

「僕はただ動けなかっただけです」

ベンウッドはそんなことを口にするが……なるほど、この場において、最も戦場を意識していたのは彼かもしれない。

何せ、彼はまだ拳を構えたままだ。母が気を抜くなりすれば、踏み込んで撃ち抜くという意思をその目に宿している。

たかが稽古と侮<sup>あは</sup>つていた俺達よりも、ベンウッドはずっと強い。

「どうする？ ベンウッド。あなたも討ち死にするかしら？」

「いいえ、降参です」

そう答えたベンウッドが構えを解くと、母はにこりと笑って、殺気を薄れさせた。

「いいわ。じゃあ少し休憩を挟んで、二回目の訓練にしましょ」

俺はというと、傷の手当て自体は済んだものの……母との実力差に、少しばかり啞然<sup>あぜん</sup>としてしまった。

自らの不利命運<sup>ディアドバンテージ</sup>が、俺自身の客観視<sup>客観視</sup>を妨<sup>さまた</sup>げているであろうことは、自覚している。

さりとて、ここまでやってこられた自分に、少しばかりの自信があったのも事実なのだ。

だというのに、まさかこれほどまでに差があるとは予想外だった。

もし、母のような伝説級冒険者や、それに匹敵する実力者が『トゥルーマンズ』側についていたとしたら、俺は為す術<sup>すべ</sup>もなく命を刈<sup>か</sup>り取られるということが実感できてしまう。

おかげで、気が引き締まった。

「はは、はあー……」

「どうしたの？ 打ちどころ悪かった？」

急に笑ったため息を吐く俺の顔を、ミントが心配そうに覗き込む。

「いいや、失敗したと思って。たかが稽古みたいな悔りを、俺ができるはずなかったと思って」

「うん。今のは、ユユ達全員の、失敗」

「アストルのせいじゃないわよ。アタシだって、前衛を抜かれちゃったんだし」

ユユとミントの労<sup>あはれ</sup>いに頷きながら、俺は母に目を向ける。

「母さん、次は全力で行くよ」

「本当なら、次なんてないことは覚えておきなさい、アストル。目指すべきは、常に一方的な蹂躪<sup>蹂躪</sup>よ」

さすが「業火の魔女」。

そうとも、☆1の俺に相手を侮る余地などなく、余裕なんてものは常にはないのだ。  
大切な友人であるミレニアを失いかけたあの日を思い出せ。

俺が「上手く収めよう」なんて考え違いをした結果を。

目的のために、手段を選んでなんていられない。

結果のために躊躇ちゅうちょなどしていられない。

そのことを思い出すのに、この敗北は充分な薬になった。

「よし、やろう。母さん、いいかな」

「母さんはいつでもいいわよ」

立ち上がった俺は、軽く指を振って姉妹妻とベンウッドに強化魔法をばら撒く。

それと同時に、気と【神威】、そして体内の魔力マナをゆっくりと混ぜ込んでいった。

「ミント、撃ち込め。ベンウッドは遊撃。ユウは二人のサポートを」

「アストル、は？」

「俺は……まあ、見ていてくれ」

ユウに曖昧あいまいな返事をして、体に広がっていく違和感を無理やりに同期させていく。

あんまり良い方法とは言えないけど、母さんを安心させるには、このくらいの無茶はしてみせないと。

「ナナシ、サポートを頼むよ」

俺が呼びかけると、ナナシは少し不満そうに応えた。

「おっと、吾輩わがはいは隠れていいものかと」

「お前つたら……俺の使い魔なんだろう？ 人数としてはノーカウントだ」

「我が主は、屁理屈おとしやを仰る」

カタカタと頭蓋ずがいを鳴らしながら、使い魔が俺の背後でぬるりと立ち上がる。

これで、実質五対一。

「ナナシ、【神威】を使う。半神化だ」

「そこまでやって大丈夫なのかね？」

「おそろくなんだけど、そこまでしないと訓練にならないと思う」

「なるほど。それはそれで、恐ろしい話だね」

背後の使い魔がどこか楽しげな声を上げて、するりと俺を包み込む。

揺らめくビロードのマントとなったナナシは、俺の『外殻がいかく』だ。

俺の存在をこの世界に固定して、逸脱いつだつしすぎないようにするための。

「何それ、格好いい！」

「お披露目ひろめはもう少し先のはずだったんだけどな」

茶化するようなことを言うミントに軽く苦笑をして見せてから、俺は母を視界に捉える。

「……いくぞ！」

俺が声を発すると同時に、ミントがその目に赤い殺気を宿して一気に踏み込む。

【狂戦士化】を完全に使いこなしたミントは、それだけで英雄クラスの剣士だが、母はその一撃を軽やかにいなす。

高難易度迷宮に挑んで本調子になってきた、とは聞いていたものの……まさか、これほどとは。

「隙ありですッ」

「なしよ？」

ミントに続いて懐に踏み込んだベンウッドが鋭く拳を打ち込む——が、それをさりと避けた母は、容赦なく彼の腹を蹴り上げた。

爪先が空に浮くほどの一撃をまともにもらい、ベンウッドが地面に倒れ伏す。

あれは痛い。もう少し容赦とか手加減とかを覚えてほしい。

「まだまだあーッ！」

体勢を立て直したミントが、重みと速度を伴った連撃を叩き込む。

母はそれをにこにここと笑いながら受け流しつつ、口を開く。

「ミントちゃん、もう一声。速さもパワーも申し分ないけど、踏み込みと技術が足りないわ」

「な……！」

「あなたは蹂躪向きよ。自分を怖がっちゃダメ。結果はどうあれ、敵は殺すのがマナーなのよ？」

動揺したミントが見せた隙は、母にとつて充分な好機となった。

つまり、あつという間に叩き伏せられてしまった。

「アストルは来ないの？」

「いや、二人は充分な仕事をしてくれたよ」

母にそう返事をして、俺は指をパチンと鳴らす。

その瞬間、母の動きが止まった。

「……あら」

「これで、一勝一敗って感じかな？」

膝をついた母に、俺はなんとか痩せ我慢で笑って返す。

そう、痩せ我慢だ。

この力は燃費が悪すぎるし、この魔法は魔力を使いすぎる。

だが、こうして母に一矢報いることはできた。

「やだ、この子ったら。母さん、やる気になっちゃう」

「え？」





構築した魔法式にひびが入っていく。

嘘<sup>うそ</sup>だろ？ 異界の神を拘束するために開発した魔法だぞ!?

存在そのものを拘束して、このレムシリア世界と同じだけの重さで動きを封じる、【神威】を込めた概念魔法。

かの『青白き不死者王<sup>ノイライフキング</sup>』が俺に使ったような、存在の根源的な部分に働きかける魔法だというのに……何故母は動いているんだろう？

「まだまだね、アストル。これじゃあ、今一つよ」

立ち上がった母が、にこりと笑って……俺に肉薄した。



「先生、動きがありました」

母との訓練を始めて一カ月。

グレイバルトが深刻な顔をして、報告書を持ってきた。

普段は口頭でのやり取りが主なのだが、報告書が上がってきたということは、詳しい分析まで終わっているのだろう。

『『トゥルーマンズ』か？』

「はい。旧モーディア皇国を制圧後、国家組織を乗っ取り……いえ、塗り潰しました」

「塗り潰した？」

「はい。『反転国家ハデイス』を名乗り、☆1主導の国家を形成した後、プロパガンダと拉致を行なって、各地の☆1を集めています」

「いよいよ『ディーパーディー』とやらを始めるつもりか……！」

それがなんであれ、良くないものだというのは肌感覚で理解している。

何せ、主催者は死の概念を司る『青白き不死者王』であるレディ・ペルセポネなのだから。

『『青白き不死者王』に関しては？』

「それが全く。表立って動いているのは、国主ロータスと……」

「待て。国主？」

耳慣れない言葉に、思わず聞き返す。

それに領いて、グレイバルトが机に広げられた資料の一枚を指さした。

組織図が描かれた報告書を見つめながら、俺は小さくため息を吐く。

「国主、か。つまり国王になったわけか？　ロータスは」

「ハデイスの基底部が『トゥルーマンズ』である以上、そうなりますね」

俺とて、ヴァインセント王に冗談めかして勧められたことがある。

——☆1国家を作ってみないか、と。

半分冗談で半分本気だと言っていたその提案は、あまりに荒唐無稽が過ぎて当然断ったのだが……ロータスはやったのけたというわけだ。

そして、俺が当時危惧した通りに世界を騒乱へと巻き込もうとしている。

「他の『二つ名付き』については？」

「『寂雪』のフレグラについては、国境部で小競り合いを起こしています」

「ぶつかっているのはグランゾル侯爵か。大丈夫だろうか」

「分析では、侵攻というよりも圧をかけるのが目的のようです。内部で何かしらの準備行動をしているのを邪魔されたくないでしょう」

グレイバルトの言葉に領いて、俺は別の資料を手取る。

「それで、何を隠している？　君ならもう掴んでいるんだろ？」

「あいにく、ガードが堅くて決定的な情報とは……」

「構わない。君の勘はきつと正確だ」

俺の言葉に少し顔を綻はせたグレイバルトが、懷から折り畳まれた紙を取り出す。

「先日、消息を絶った『木菟』からの報告書です」

「……！」

「お気になさらないでください。彼は仕事に殉じたのです。メリゼー子爵家子飼いの『砂梟』ではなく、『木菟』として生きたことを誇りに思っているはずです」

そう言われて、俺は喉まで出かかった言葉を呑み込む。

頭目たるグレイバルトがそのように言っているのに、俺が彼らの生き様に水を差すわけにはいかない。

こうした犠牲が出るだろうことも、少し覚悟はしていた。

だが、やはり現実突きつけられると、罪悪感が残る。

「彼の報告によると、戦争を始めるつもりの方です」

「戦争、か。元モーディアの国力をもつてか？」

口にしてから、それはないと首を横に振る。

モーディア皇国というのは、『トゥルーマンズ』にとって怨念の地だ。

彼らにとってホームグラウンドであると同時に、最も許されざる場所。

『穢結石』で住民ごと塗り潰したんだな？」

「はい。今やあの地は、余人の立ち入れぬ忌み地です。もはや偵察も放てません」

「いいや、充分だよ」

そう、充分だ。何をしようとしているのか、うつすらとわかった。

反転国家という名前が、すでに目的を示している。

ロータス達『トゥルーマンズ』は、この世界を丸ごとひっくり返すつもりなのだ。レディ・ペルセポネの加護と人造魔王の作り出す『穢結石』によって。

「終末の神と魔王がいつべんに来るなんて、ずいぶん大事になったな」

「それに対抗するために先生がいると、小耳に挟みましたが？」

グレイバルトの言葉に、思わず噴き出してしまう。

それこそ、ずいぶんと大役を任せられたものだ、と。

俺というのは、少しばかり小器用な☆1の魔法使いにすぎないというのに。

「各所への通達はいかがいたしますか？」

「エルメリアには俺が直接出向くよ。すまないが、君は状況変化に備えてくれ」

「やはり、起こりますか？ 戦争が」

「いいや、起こるのは『淘汰』だよ。彼ら、この世界を変えるついでに何もかもダメにしてしまうつもりみたいだ」

ただの戦争であれば、まだ良い。

いや、良くはないんだけど……それは、人の営みの範疇にある。

だが、レディ・ペルセボネという『はじまりの混沌』の影響がある以上、それはもはや別次元の話だ。

「煙火」のレザニアという男が反転したように、この世界そのものが別のモノにすり替わってしまった。

あの異様が、この世界の普遍となってしまうば……事実上の世界滅亡である。

「それじゃあ、行ってくれ。俺も動くよ」

「はい。それでは」

景色にじんで消えるグレイバルトに軽く頷いて、俺も立ち上がる。

そして、部屋の中を歩き回りながら、まとまらない考えを整理していく。

「ロータスの考えがわからないな。☆1救済はもうやめたのか？ 世界を丸ごと滅ぼす方向にしたんだろうか？ そもそも、動きが遅い。『不死者王』が動けばもっと手早い。ティーパーティーとは何を指す……？」

「お困りだね、我が主。アドバイスが必要かな？」

俺の独り言に、応える声があった。

「おっと、ようやく戻ったのか？ ナナシ」

「ずっといたさ」

「その割に姿を見なかったようだけど？」

この使い魔は、ここどころ姿を現さなかった。

側にいることはわかっていたが、呼びかけても返事をせず、気配を希薄にしていたのだ。

「なに、少しばかり君の力を使って調べものをしていたんだ」

「それで、アドバイスは？」

「『不死者王』についてだけど、彼女が動かないのには理由がある」

「聞かせてくれ」

俺はソファに座り直し、茶菓子のクッキーを差し出しながら、ナナシに尋ねた。

「負荷が高すぎるんだ。あるべき時に現れる彼女が、予定外に現れてしまったからね」

「ああ、それは俺の【神威】の時も聞いたな。あまり長居できないって話だろ？」

「それだけじゃない。彼女は順番を抜かしたんだ」

首を傾げる俺に、ナナシはクッキーをかじりながら、指を小さく振った。

「本来、あの『青白き不死者王』は支配、戦争、飢饉の『淘汰』の果てに登場する『終末』だ。何もかもがダメになって疲弊しきった世界を反転させ、死の世界へと変じさせる役割を持っている」

「つまり、今の世界は居心地が悪いわけか？」

「どこかの『魔導師』があらゆる厄災のタネを解決してしまったからね」



ナナシがご機嫌そうに頭蓋を鳴らす。

相変わらずの様子に少しばかり安心して、俺は疑問を挟んだ。

「じゃあ、何故この世界に『不死者王』がいるんだ？」

「そこだよ。それが知りたくて、少しばかり時間を遡航させてもらった」

「え？」

「君の力を使って『全知録』にアクセスしたんだ。おかげで擦り潰されるかと思ったよ」

俺の使い魔がとんでもないことを言っている気がする。

『神々の書庫』と呼ばれる『全知録』には、この世の全ての知が集約されているとされる。ナナシ

は優秀で得体のしれない奴だが、まさか『ダンジョンコア』もなしに『全知録』へ意識を捻じ込むなんて。

「後学のために尋ねるけど……それ、俺にもできる？」

「無理だね。吾輩だってできればしたくなかったんだ。だけど、いろいろとわかったことがある」

「教えてくれ。今は、いくらでも情報が欲しい」

ナナシが黄色い目を細めて、俺を見つめる。

そして、衝撃の言葉を放った。

「モーディアの研究者はずいぶんと愚かで、ずいぶんと天才だったみたいだ。あのレディは……生

身の体に降ろされた、憑依体だよ」

ナナシ曰く——あのレディ・ペルセポネは、☆1の少女に降霊した『青白き不死者王』の憑依体であるらしい。

端末であり、コピーであり、本人でもあるという存在で……つまり、この世界の人間の体を使って無理やりに顕現している。

「おそらく、人造魔王の研究の一環だろうね。『存在係数』が低い☆1の体に、どこかしらの『異貌存在』を捻じ込もうとしたんだろう」

「それがどうして『不死者王』を捻じ込むことになったんだ？」

「さあ？ おそらく偶発的な事故だと思うよ。だけど、それが『トゥルーマンズ』の起点になったのは、『全知録』で視てきた」

魔法実験に事故はつきものだ。

この学園都市で暮らしていれば、それは嫌でも理解する。

それにしあって、☆1を認めないモーディア皇国の研究者が、最も☆1の特性を理解していたなんて、少しばかり意外だ。

☆1の『存在係数』や拡張性についての研究がとて進んでいる学園都市でだって、☆1を召喚素体にするなんて発想は、まだ聞いたことがない。

☆1を非人間扱いするモーディア皇国だからこそ生まれた考えなのかもしれない。

「つまり、ティーパーティーが佳境に入るまで、レディは動けないってことさ。だけど、使徒に任せられたロータスは違う」

「ああ。あいつは目の前でレザニアを『反転』させた。その時に『青白き不死者王』の気配も確かに感じた」

「あの時はロータス一人だったかもしれないけど、今は取り巻きも『使徒』になっているかもしれないね。概念的な繋がりを得た彼らは、少しばかり厄介だよ？」

「もしかして、『神威』を使ってくるか？」

俺の言葉に、使い魔は首を横に振って答える。

「それはないはずだ。あるとしても、劣化コピーをさらに劣化させた異能くらいだろうね」

「じゃあ、『トゥルーマンズ』達の能力って……」

そう口にしてから、合点がいった。

『先天能力』にしたって些かおかしいあれらの能力は、瘴氣由来のものかと思ったが、おそらく

『青白き不死者王』も一枚噛んでいるのだろう。

その人間に関わりの深い異能を引き出しているのかもしれない。

「わかったことは多いけど、対策になりそうなものは少ないな。『青白き不死者王』を物理的に押

さえられそうだってこと以外は」

「そこだよ、我が主。この世界の生物に依る以上、レディの力はこの世界の理に縛られる。では、どうやってこの世界をひっくり返す？」

ナナシに問われた俺は首を捻る。

『穢結石』をばら撒く？ いや、非効率だな。それに、俺達が対策する方がきつと早い。世界を大本から反転させるっていうなら、もっと根本的な方法が必要か……？」

考えるうちに、一つの答えに行き当たる。

「まさか、今から手順を守るつもりか？」

「我が主はそれなりに賢いようだね。そう、彼らは他の『終焉の王達』か、それにあたる『淘汰』を呼び込むつもりだろう」

「その根拠は？」

「『全知録』がそう予測していた、としか言えないね」

どうやらナナシは、『全知録』でろくでもないことを知ってしまったらしい。繋がりからもそれが伝わってくる。

「だから、彼らは『超大型ダンジョンコア』を欲するだろう」

「いくら無限の願望器たる『超大型ダンジョンコア』でも、そんな願いを叶えられるのか？」

俺の質問に、使い魔が黄色い目を細めて首を横に振る。

「そうじゃないよ。『はじまりの混沌』がなんたるかを思い出してみたまえ」

懇懇無礼なナナシにため息を吐きつつ、俺は答えを口にする。

『終焉の王達』を指す言葉。創造者にして破壊者。この世界の循環の最後を司る『異貌存在』、だろ？」

「模範的な回答だね。では、彼らはどうやって顕現する？ この世界に影響を及ぼす神々の『存在係数』はいかほどだい？」

「そうか……！ それで『超大型ダンジョンコア』が必要なのか」

「むしろ逆なんだよ、我が主」

わずかに俯いたナナシが、小さくため息を吐いたように見えた。

「本来、『超大型ダンジョンコア』は彼ら『終焉の王達』をはじめとした外部存在の顕現ソースとしてこの世界にあるんだ」

「なんだって……!? じゃあ、王都の『シェラタン・コア』も……?」

「あれについては情報を得ていないね。けれども、『エルメリア王の迷宮』を生み出している超大型ダンジョンコア『コレー・コア』は、『終焉の王達』に対応したものだ。初代エルメリア王は、いろいろと知りすぎた人だったみたいだね」

その言葉を聞いた瞬間、冷たいものが背中を駆け抜けて、喉が鳴った。

グレイバルトは『反転国家ハデイス』についてなんと報告していた？

土地ごと住民全てを瘴気で塗り潰したと言っていた。

その言葉から察するに、エルメリア王国での魔王事変よりもずっとひどい状態なはずだ。

守るべき場所を持たない彼らは、かつてモーディア皇国に住んでいた人間全てを『悪性変異』に変えて南下してくる。

そして王国が人為的な『大暴走』の対応に追われているうちに、『トウルーマンズ』のメンバーは『エルメリア王の迷宮』に潜り、『コレー・コア』にベルセボネを接触させるつもりに違いない。

シンプルだが、効果的で効率的なアクションだ。

「対策を考えないと」

「残念ながら、できることはかなり少ないね」

ナナシの言う通り、相手の行動がシンプルであるが故に、できることは限られてくる。

バケモノどもが攻めてくる以上、無視するわけにはいかない。

つまるところ、直接的に『トウルーマンズ』を止めるしか方法がないのだ。

「ティーパーティーって、こういうことか……!」

「少なくとも、彼らは準備を進めているようだね。テーブルとなるのは、おそらくエルメリア王国

だろう」

茶話会なら茶話会らしく、言葉のやり取りで終わらせたいものだ。

まあ、俺とロータスでは平行線にしかないだろうけど。

「さて、どうする。俺に何ができる？」

口からこぼれたのは、そんな自問だった。

選択肢は少ない。いや、むしろ一つしかないとも言える。

「……ダンジョンアタックの準備をしよう。『トゥルーマンズ』より先に、俺達で『コレ・コア』を押さえる」



『無色の塔』の一階のリビングにあたる部分にみんなを呼び集めた俺は、『青白き不死者王』と『トゥルーマンズ』の狙いについて、できるだけ詳細に話した。

「俺達といくつかのパーティでダンジョンアタックをかけようと思います」

「ふむ、それしかないのう」

俺の話聞き、狼人族の侍にして、学園都市の賢人でもあるレンジュウロウが、重々しく首肯

した。

ユユとミントをはじめ、他のみんなもそれぞれに静かな決意を目に宿している。

「エインズ様は来てくださるでしょうか？」

「そう心配せずとも来るとも。ワシらはパーティじゃかな」

ハーフェルフの忍者であるチヨが、夫のレンジュウロウに問いかけた。

俺達のパーティのリーダーであるエインズは残念ながらこの場にいないが、レンジュウロウの言う通りこの一大事に協力は惜しまないだろう。

「連携的にも突入パーティの一つはアタシ達に決まりね！」

ミントの言葉に頷いて、俺は妹のシスティルを見やった。その隣には、彼女と恋仲にある生徒のダグが寄り添っている。

「システィル、ダグ。二人はこの『無色の塔』で待機だ」

【勇者】のスキルを持つシスティルは、こういった危機的場面で強い力を発揮するはずだが……正直、迷宮仕事には向いていない。

「言うと思った。私はついてくからね、お兄ちゃん。もう一人前なんだから」

システィルは不満を隠そうとしないが、ダグがそれを察める。

「了解ッス。システィルちゃん、先生の期待に応えよう」



「ダグ？」

「この塔にはたくさんの魔法道具が収納されているから、防衛に関してはダグに任せられる。けど、そのサポートをする小回りが利く人間も必要だ。フェリシアも学園都市の防衛に回ってもらったつもりだ」

そうは言ったものの、俺の言葉には実のところ一理未満しかない。

大切な妹と生徒を、それに義姉あねのフェリシアを、戦場に連れて行きたくないのだ。

母からすれば、*「甘い」*の一言だろうが。

「もし、だけど……エルメリアで俺達がしくじった場合、世界の命運にぎを握るのはここになる。ここには『塔』があるからな」

学園都市の中心部……『学園』がくえんの地下には、この世界と異世界をバイパスする『塔』と呼ばれる超巨大魔法道具アークが眠っている。

この世界が終わりを迎える時、人類の避難と脱出を念頭に入れるなら、この学園都市は守らなくてはならない最重要都市の一つとなる。

「お兄ちゃん？」

咎めるような妹の視線に、俺は苦笑しながら答える。

「もちろん、失敗前提ってわけじゃないさ。だけど、ここを落とされたら何かあった時のリカバ

リーができない。それに、ここは俺達の家だからな」

俺が生まれ育った故郷はもうない。『大暴走』スタンビートに吞まれ、それを俺と母が焼いた。だから、この場所を失うわけにはいかない。

「アストルは、背中を任せる、って、言ってるんだよ。安心して、負けない、から」  
そう言って、ユユがいまだ納得いかなさそうなシステイルをふわりと抱きしめる。

「ユユ義姉さん……。うん、わかった。みんなの帰る場所は、絶対に守る！」

「うん。システイルなら、安心」

ユユと抱き合う妹に少しばかりほっとしながらも、俺は用意した書簡を順に指さす。

「それと、母さんのパーティには王都の『シエラタン・コア』を守ってもらう」

「あれ？『エルメリア王の迷宮』ダンジョン攻略班じゃないのね？」

ミントの言葉に、小さく頷く。

「それも考えたんだけど、王都が落とされるのもマズい。『王城地下迷宮』シエラタン・デザイアなら義母さんの方が詳しいし、戦力的にも安心できる。ヤツらの狙いは『コレー・コア』だろうけど、『シエラタン・コア』を『機結石』インヒアリアにされでもしたら、目も当てられないからな」

俺の考えに、レンジュウロウが同意を示す。

「確かに、御母堂ごぼどうのパーティならば王都と『シエラタン・コア』の心配はいらぬな」

「ええ。それに、そうすることでバグナー領都にヤツらの目を誘導することもできます」

最強の冒険者たる『業火の魔女』のパーティが王都に在るという情報を流せば、『トゥールマンズ』だって相当警戒をするはずだ。

元☆1である彼らがどこまで『業火の魔女』を知っているかは不明だが、それもこちらが『王都』は守りを厚くしている。世界最強の冒険者が防衛にあたっている。などと情報を流せば耳には入る。そうならば、わざわざ守りの堅い王都を狙う可能性は低いだろう。

こう言うてはなんだが……彼らは年若く、知識も思慮も足りない。

『淘汰』の先兵だとか『青白き不死者王』の使徒だとか、大仰な立場はともかく、『トゥールマンズ』として相対した俺の感想を言うなら、彼らはストリートギャングとそう大差ないと感じた。

……俺と違って、連中を取り巻く『大人』は、彼らをまさしく☆1としか扱わなかったから。だからこそ、このあからさまな誘導は彼らに有効だと考える。

「上手くすると、『エルメリア王の迷宮』で彼らを仕留められるかもしれないしな」

自分の口から『仕留める』という言葉が出たことに、少しばかり自嘲する。

油断からくる言葉ではない。ただ、俺は『トゥールマンズ』を敵だと強く認識しているらしい。

同じ☆1という境遇同士、もう少し相互理解の機会があってもいい……などと表で考えておきながら、深層意識下ではわかり合えないことが理解できてしまっているのだ。

「アストル様、他の迷宮に関しては守らなくてよいのでしょうか？」

チヨの疑問は当たり前だろう。

「それについては、ある程度調査をしました。今のところは警戒しなくてよいと考えています」

他に『ベルベティン大神殿』と『サルヴァン古代都市遺跡群』にも『超大型ダンジョンコア』は存在するとされているが、どちらも難攻不落と言っているほど攻略が進んでいない。

しかも、ナナシが言及しないということは、それらは終末に向かないコアなのだろう。

逆に『コレー・コア』のある『エルメリア王の迷宮』は、すでにミレニア主導で攻略準備が進んでいる。

計画を前倒しすることにはなるが、あの迷宮の攻略は既定路線だった。

「迷宮攻略についてはミレニア達にも同時進行してもらうつもりでいます」

「地上の警戒はどうするのだ？ 彼奴ら、瞬間移動を使うのであろう？」

眉根を寄せるレンジュウロウに、俺は小さく頷いて返す。

「その点については、グレイバルトが有益な報告を上げてくれました。『百歩移』のブリトニーが一度に運べる人数には限りがあります」

それを聞いて、ミントが安堵の表情を浮かべる。

「つまり、軍勢が現れることはないってわけね？」

「どうやら、多くとも二十人程度までしか運べないらしい」

各地で起きている拉致事件や出現情報などをグレイバルトが精査した結果、せいぜい十数人の転移が限界だとわかった。

それでも十二分に脅威ではあるが、大人数で街を占拠したりはできないはずだ。

加えて、密閉空間には移動できないこともわかっている。

グレイバルトの観察によると、歩いて入れる場所かつ一度行つたことがある場所にしか跳躍できないらしいと判明した。

いかなる機序で転移しているのかは不明だが、俺のように地脈が通つていればどこにでも行けるといった類の力ではないようだ。

「そもそも、『エルメリア王の迷宮』は入殿管理が比較的厳しい迷宮だ。あいつらだつて策なしで忍び込むのは難しいし、すでにミレニアに頼んで地上部分を封鎖、警備してもらうように〈手紙鳥〉を飛ばした」

俺の話を聞いていたレンジュウロウが大きく頷く。

「では、ワシらも急いでバーゲナー領都へ向かわねばならんな」

「俺とユウ、それからミントは〈異空間跳躍〉で先に行きます」

「お主だけでなくか？」

「少しばかり人から離れたからね、そういう真似もできます」

軽い自嘲を込めて、苦笑する。

だが、そんな俺の頭をレンジュウロウがガシガシと撫でたかった。

「ちよ、レンジュウロウさん……!？」

「大人ぶった顔をしおつて。また悪い癖が出ておるぞ」

鋭い牙を見せながら、狼人族の侍がニヤリと笑う。

「人でなくなろうとも、半分神になろうとも、お主はお主よ。〴〵できることをできるだけ」がお主の信条であろう？」

「そうでした」

「ならば、いつも通りお主にできることをすればよい。ワシらも同じじゃ」

そう笑うレンジュウロウに、胸が熱くなる。

まったく、この人にはいつまで経つても頭が上がらないな。

「旦那様。皆さんが転移されるのなら、わたくし達は早々に動かねばなりませんね」

チヨに応え、レンジュウロウがあれこれと段取りを始める。

「うむ、出立の準備を急がねばならんな。馬……いや、走蜥蜴を一騎借りるとしよう。ワシの体躯ではそちらが速い。お前は軽い故、共に乗れば問題なからう」

「承知しました。準備はいつも通りでよろしいですか？」  
「なに、途中で買い足すこともできるし、バーグナー領都ならばおおよそ揃おう。今は迅速さを優先せねばの」

二人の自然な姿に、少し微笑ましくなる。

かつて親子の関係を続けていた二人が夫婦となるのは、いろいろと大変だったのだ。特に、レンジュウロウが。

だが、この様子を見るに、すっかり夫婦が板についているみたいだ。

「……そのような目で見るものではないぞ、アストル」

「おっと、気付かれてしまいましたか」

小さくため息を吐くレンジュウロウから、俺はそっと目を逸らした。

「では、ワシらは出立の準備にかかる。エインズは道すがら合流するでしょう」

「わかりました。俺達はバーグナー領都に先行して準備を整えておきます」

「うむ。ミント、ユユ、此奴が一人で突っ走らぬよう、よく見ておくのじゃぞ」

「わかつてるわよ。アタシ達、奥さんなのよ？」

「ん。ちゃんと、見張って、おく」

レンジュウロウに応え、二人が俺の両手をそれぞれ握って、大きく頷く。

それに苦笑しつつも、俺は少しだけ心が軽くなるのを自覚した。



レンジュウロウ達の出立を見送って、俺達はすぐさま王都の『井戸屋敷』へと跳んだ。

転移魔法に誰かを巻き込むなんて初めての体験だったが、思いのほか簡単だった。

それほど、姉妹は俺という存在に馴染んでいるらしい。

とはいえ、予想されたことでもあった。

今の俺の体は、一度滅びたところを二人が使った伝承魔法によって再構築したものだ。

存在としての概念が近い。

加えて、俺は『過ぎ去りしいつかのあの日』で人間の存在をどのように観測、確定させているかということのヒントを得ている。

「繋がり」によってそれを俺が観測し、保持すれば、地脈で彼女達を危険に晒すリスクはほとんどない。

それでも、☆5のミントはずいぶんひどい転移酔いに苛まれたようだ。

やはり、☆5というのは『存在係数』が高い反面、こういった世界のあやふやな部分を利用した